## ☆寒々体罰と子どもの人権

虐待や体罰の末に親が子どもを殺してしまう、教員からの体罰を苦に自殺してしまうなど、子どもが犠牲になる痛ましい事件が後を絶ちません。体罰は許されるものではなく、体罰が暴力であり、子どもの人権を否定するものであるととらえるとともに、体罰をなくしていくための取り組みについて考えます。

### 声でつながり、 地域へつなげる虐待防止の取組み

NPO法人児童虐待防止協会理事

川本 典子さん



わたしたちの団体は、医療、福祉、母子保健などさまざまな分野で活動する専門職が集まり、1990年に虐待に取り組む組織としては全国初の民間団体として設立されました。わが子を虐待している人や虐待の一歩手前という状況に陥っている人たちを支援するには、フレキシブルに対応できる民間での活動が必要だと考えたのです。まずは匿名で声でつながれる電話相談を活動の柱としました。

当時、虐待する親に対する社会のまなざしはとても厳しく、子どもに手をあげていることなど簡単には口にできない空気がありました。けれど1988年に関西テレビ放送(設立時からの支援団体)が子育てに悩む親を取材したドキュメンタリー番組を放送したところ、深夜帯にも関わらず大きな反響がありました。「いけないと思いながら、子どもを叩いてしまう」と語る母親の言葉に、多くの母親が共感するとともに、社会的には育児の過酷さが衝撃をもって受け止められました。このことも団体設立のきっかけの一つとなっています。

#### 複雑化する虐待の背景

その後、虐待の実態や子育ての環境の厳しさなどが徐々に認知され、現在は虐待が身近な問題として話せるようになりました。しかし子育ての状況が楽になったわけではなく、むしろしんどさが見えにくく、また複雑になっているように感じています。たとえば行政などの子育て支援メニューが充実し、電話開設当初多かった親子の集える場所がないといった悩みはあまり聞かれません。集まれる場の選択肢が増えたのはいいことです。しかし一方で、電話相談を受けていると子どもや他人とのかかわりそのも

のがつらいという人が増えているのも感じています。そうした人はさまざまな支援があるのを知っていても、アクセスしたり人間関係をつくったりすること自体がしんどいと感じ、なかなかつながることができずにいます。

#### 地域で安心してサービスを受けてほしい

虐待は子育てをひとりで抱え込むような孤立した 環境で起こります。そのため、私たちは電話相談を 通じてできるだけ地域や行政の支援につながって いただくことを目標においています。「叩いてしまっ た」「子どもがかわいく思えない」といった本音を受 け止めることで気持ちが楽になることもあります が、虐待という行為はそう簡単に治まるものではあ りません。親自身が深く傷ついていることが多いか らです。まずは私たちの相談活動のなかで「話を聞 いてもらえる」「責められない」ということを経験し、 安心して地域での支援につながってもらう。それが 虐待から子どもを救うことになります。

近年、社会全体で虐待に対する危機意識が高まってきたのはいい傾向だと思います。けれど親の方に「泣かせたら通報されるのではないか」という恐怖心や監視されているようなプレッシャーが高まっているのも事実です。充実してきた子育て支援のサービスを知ってもらい、「一人でがんばらなくてもいいんだ」と伝わるような情報発信、信頼関係づくりにもさらに取り組んでいきたいと考えています。

NPO法人児童虐待防止協会 TEL: 06-6762-4858 子どもの虐待ホットライン TEL: 06-6762-0088 子ども専用フリーダイヤル キッズライン TEL: 0120-786-810 http://www.apca.jp/index.html

# 力関係の「濫用」が生み出す体罰は決して許されない

NPO法人女性と子どものエンパワメント関西理事長

た がみ とき こ 田上 時子さん



体罰は大人の都合でしかない

私は70年代から80年代にかけてカナダのテレビ局で働きました。ジャーナリストとして、子どもの虐待やDVなどあらゆる暴力を報道しながら、人は暴力では育たないということを学びました。ところが1988年に帰国した時、暴力や性暴力に対する日本の報道に大きなカルチャーショックを受けました。たとえば当時起きた幼女連続殺人事件の報道はセンセーショナルなものばかりで、なぜ大人ではなく子どもが被害に遭うのかといった議論はほとんどみられませんでした。

暴力は必ず力のある側からない側へと行われます。例えば体罰は「しつけ」「指導」という名目で、実際にはその時の気分や役割意識など自分の都合で、大人と子どもの力関係を濫用しているのです。虐待は英語でabuseと書きます。直訳すると「適切に利用しない」、つまり濫用ということです。

#### 暴力の容認は思考停止で無責任

日本では長い間、しつけや指導としての体罰が容認されてきましたが、暴力を受けて喜ぶ子どもはいません。ところが体罰について議論をすると、「最終的な手段として体罰が必要な時もある」などと必ず暴力を肯定する意見が出ます。「自分も子ども時代にしごかれたが、おかげで強くなった」と言う人もいますが、人は自分を守るために不快だったり傷ついたりした記憶を塗り替えることができます。「自分は体罰で成長した」と塗り替えられた記憶を、暴力を肯定したい人たちが利用するという構図があります。

それでは、暴力はなぜいけないのでしょうか。体罰を容認する人に説明する時、私は2つの理由を挙げます。まず、暴力を行使することで子どもは「大人は暴力で問題を解決するのだ」と学びます。つまり体罰は子

どもに暴力を教えていることになります。そして、最終手段として暴力を容認することは思考停止であまりにも工夫がなく、無責任だということです。体罰はしつけや指導という名目でおこなわれますが、子どもには「問題があれば暴力で解決すればいい」ということだけが伝わり、「あなたには力がある」というメッセージや生きていくために必要な知恵や技術など本当に伝えるべきことは決して伝わりません。子どもにとって暴力のメリットなど何一つないのです。

#### 子どもの「内なる力」を引き出す知恵を

すべての子どもは「内なる力」をもっています。その力を発揮できるようサポートするのが親や教師の役目です。しかし人間は力を持つと濫用する傾向があります。子どもと向き合う大人はそのことをしっかりと自覚することが大切です。同時に、子どもたちの内なる力を引き出すための工夫をしましょう。例えばしてはいけないことを教えるのではなく、何ができるかを教えます。子どもに語りかける言葉を「~してはダメ」という否定語から、「~ができるよ」という肯定語に変えるのです。子ども自身が自分の力を信じ、自己肯定感をもって生きていくために何を伝えればいいのか。私たち大人に求められているのは、そのための知恵と工夫なのです。

NPO法人女性と子どものエンパワメント関西 TEL: 0797-71-0810 FAX: 0797-74-1888 http://www.osk.3web.ne.jp/~videodoc/